

人間疎外と家族介護者の倫理的歪みの連関 －善と悪の心から観る社会福祉の再考－

The Links between Human Alienation and Ethical Distortion of Family Caregivers: Reconsidering Social Welfare from the Heart of Good and Evil

(2022年3月31日受理)

中 野 ひとみ

Hitomi Nakano

Key words : 社会福祉, 家族介護, 善と悪の心, 人間疎外, 倫理観, アウグスティヌス

抄 録

人間の心はどのようなときに倫理観が歪み悪を起こすのか。現在起きている家族介護の非人道的行為をアウグスティヌスの善と悪から考察し、人間疎外と心の連関から社会福祉を再考した。

孤独や貧困、紐帯との離脱、周囲からの孤立、自己の善悪をも揺るがすような葛藤との戦い。あらゆる概念を覆される状況が続く家族介護の難しさ。本来あるはずの自己のブレーキが効かなくなった時、他者を顧みることへの忘却、そして知らぬ間に心が歪み、コントロール不能時に人間の倫理観は容易く崩壊する。

アウグスティヌスは、悪は人間が生きていく生活上で湧く欲や習慣さえも悪を招く要因とし、善と悪は表裏一体に人間に存在し得るものとし「悪を形相の欠如、形があればこそ、その損ないとして悪がある。」と表している。²⁾ 人間の心とは脆弱で、時として破壊的な方向性も秘めている、またそれを制御できるのも自己自身である。このような人間の心を社会福祉はどのように捉えていくべきなのか。

変化の激しい社会を、より多元的で横断的な学問領域の探求や知の統合が今必要であり、人間の本質に眼を向けること、その心をどう考えていくべきか重大な岐路にある。

1. は じ め に

1-1. 問題の所在と目的

人は、何故悪を起こすのか。人間誰も生まれながらの悪人はいない。しかし、何かの拍子に人間の心に歪みが生じ、それが悪として表出する。それは時として社会の課題として我々は見聞し、その度に人間の弱さや無力さを思い知ることになる。

家族介護による非人道的行為もその一つである。家族という繋がりの中で相手を支え、心を通わせ行っていた支援が、ふとした拍子に壊れていく。それは時として取り返しがつかない生命に関わる案件として社会で浮上する。人間は生まれながらの悪人はいないのならば、何

故人の心に悪が肥大していくのか。

「心」の哲学者アウグスティヌスは、¹⁾ 人間の善と悪は全く別のものではないとし、同一にその人間の中に存在し得る心だとしている。悪を形相の欠如とし「形があればこそ、その損ないとして悪がある」としている。²⁾ また、「悪はどこから由来するかを問題にする場合には、まず悪とは何かを問われるべきであるが、悪とは自然本性的な限度や形象の秩序の壊滅以外の何ものではない」²⁾ と表している。だとするならば、人間の心の秩序の壊滅は何故起き、どのような時に歪みが生じ、悪を表出するのか。

現在起きている家族介護の非人道的行為の実態から人間の倫理観は何故歪むのかに焦点を当て、アウグスティ

ヌスの善と悪から人間疎外と心の連関を考察し、社会福祉の再考を本稿の目的とする。

2. 介護における社会福祉の溝

2-1. 家族介護の状況

社会福祉の取り巻く現状は多様化し、その課題は複雑な世の中の形相を表している。とりわけ介護に関する問題では、親子間による介護の問題だけでなく、夫婦で行う老老介護や近年ではヤングケアラーの実態等がようやく表面化している状況がある。

また、こうした家族で行う介護の難しさを社会が知るきっかけは、そのほとんどがメディアから漏れ伝わる情報であり、その度に家族介護の難しさや支援のあり方を見直すことになる。

このような家族介護の中で、時折介護の末に起きる介護殺人や心中等、悲惨なニュースが浮上する。どれだけ社会福祉のシステムや制度施策が整備されても、介護の末の悲しい事件は一向に減ることはないのである。まさに、こうした課題は社会の隙間から零れる社会福祉の溝だといえる。

家族介護の負担を軽減する支援方法の確立は、以前と比較しても格段と飛躍しているものの、こうした悲しい課題は消えることはなく、毎度起こるニュースを見る度に社会福祉の無力さと溝の深さを思い知るのである。

家族介護の課題で、家族を殺めてしまう実態が社会の中で表面化する度に身内同士で行う介護の難しさと同時に、今まで共に生活していた家族介護者たちの心に、一体何が起きたのかを考えさせられることになる。社会福祉の溝にある介護の課題は、まさに人間の生きる事、心の課題でもある。このような人間の心に関わる課題が浮上するたびに、社会福祉の中で人間を理解することの重要性を示唆する内容でもあることが明らかとなるのである。

今まで共に生活をしていた家族介護者たちの心の歪みは、何故起きるのか、人間の心に湧く悪とは何であるのか、これらを十分に検討する余地があると考え。介護を通して悪に転じる人間の心をどう捉えるのか。社会福祉は忘却するわけにはいかない課題なのである。

2-2. 家族介護による非人道的行為の実態

厚生労働省統計による「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」に基づく対応状況等に関する調査結果によれば、介護を理由とした家族間による殺人は、年間20～30件発生している。これらの件数は、高齢者介護だけをまとめたものであり、障害児・者や子どもに関する殺人、心中事件の数は別立てとなっている。そのため、実際の家族介護に関係する死亡事案数は、ここに挙げた件数より、さらに多いことになる。

こうした家族による非人道的行為は、社会福祉の制度や支援方法の確立が行われている昨今でも、ゼロになることはない。家族によって起きる非人道的行為の背景に一体何があったのか。そこに思いを巡らすと、おそらく周囲との孤立や介護サービスにまで辿り着いていない現状は容易に想像できる。もしかしたら、介護サービスを利用してれば最悪の事態は免れたのかもしれないと考えるところでもある。特に昨今のようなコロナ禍による社会状況は、さらに家族介護者たちを孤立させる要因になっていることも推測できることでもある。

しかし、実際のところ介護サービスを使用している家族介護による死亡事案の完全なる抑止に結びついていない事も、この実態調査からは明らかである。例えば、令和元年度の介護中に亡くなった死亡事件数15件、死亡者15名である。そのうち介護保険サービス利用者6人(40.0%)、過去に受けていたが亡くなった時点では受けていなかったが1人(6.7%)、過去も含めて受けていなかったが8人(53.3%)という結果である。³⁾死亡に至った詳細については表1に示す。もちろん、介護サービスが抑止に繋がったケースがあっただろうことも否定はできないが、実際にはサービス利用中であっても、家族が非人道的行為に至ったケースがあることは特筆すべき点でもある。

介護サービスを利用する事で家族の心の負担減少に繋がることも紛れもなく事実ではあるが、サービスを使用している、全ての抑止には繋がっていない事も事実である。介護サービスが家族介護者の心の抑止に繋がらず、一体どのように状態であったのかは、この調査からは不明である。

厚生労働省が示す過去10年間（平成18年～令和元年）に起きた高齢者における家族介護中に対象者が亡くなっ

た人数と事案件数を表にまとめた内容を図1^{※1}に示す。また、過去5年間（平成27年～令和元年）に家族介護中に亡くなった事案の詳細を表1^{※2}に示す。

これらの死亡件数には、介護殺人や心中のほか家族介護者によるネグレクト等、介護中の事故で亡くなった事案の全ての件数である。しかし、実際には、どのような状況下で起きた事案かについては、具体的な詳細までは読み取ることができていないことを加えておく。^{3) 4) 5) 6) 7) 8)}

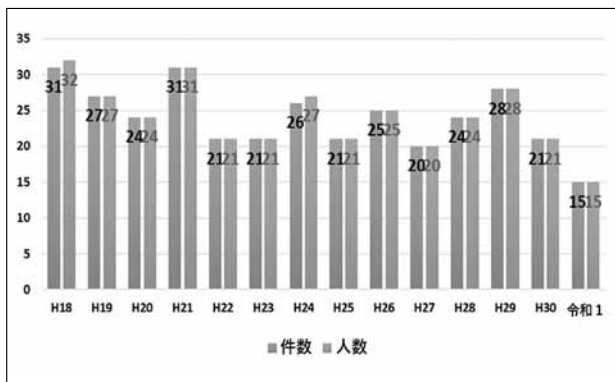


図1. 過去10年間の家族介護での死亡件数

表1. 家族介護中の対象者死亡事案

要 因	H27	H28	H29	H30	R1
養護者による被養護者の殺人	7	9	9	4	6
養護者の虐待(ネグレクトを除く)による被養護者の致死	6	10	2	5	5
養護者のネグレクトによる被養護者の致死	5	2	7	5	3
心中(養護者、被養護者とも死亡)	1	3	2	1	1
その他	1	1	8	6	0
合計	20	25	28	21	15

2-3. 介護を行う家族の心の揺れ

家族介護や支援の末に起きる悲慘な案件は後を絶たない。そこに至る経緯は家族それぞれである。がしかし、こうした事案が特別な人たちだけが起こすことだとは言えない社会福祉の溝がある。

近年の事案でいうと、21歳の孫が自分の祖母の介護に疲れ果て、手をかけた事件は記憶に新しいところである。⁹⁾ また、10年以上母親の介護日記をつけ介護を続けていた息子が認知症の70歳の母親を殺害した事件も最近のこと

である。¹⁰⁾

こうした介護殺人は無くなることはない。これら2つの事例からも家族介護者の心がもともと歪んでいたわけではないことも容易に想像できる。憎しみや悪だけがあったとは到底思えない。むしろ自己犠牲を払いながら、善の心や家族ならではの愛情を持って対象者に尽くしていたものと考えられる。それが何かによって人間の倫理観に歪みが生じ、善が消失もしくは萎縮し、悪の心に転じたということになる。となると、善と悪のどちらか片方のみが人間の心にあるのではなく、善と悪は同一に人間の中に混在し、それらは自己の内在にあったことが、ここから理解される。

いずれにせよ、こうした家族による支援対象者への危害は許されることではない。また、どのような理由にしろ、相手を傷つけた時点で全てが虐待という括りでまとめられる。どんなに一生懸命昼夜を問わず、介護を行っていたとしても、介護対象者に危害を及ぼした時点で、それは虐待になるのである。例え、行為に及ぶその直前まで家族としての愛情がそこに存在していたとしても、全てが虐待として取り扱われるのである。これら全てを虐待という位置づけで纏めて良いのかという点においても疑問が生じる点ではある。

無論、対象者を死に至らしめる虐待の行為を肯定しているのでは決してない。どんな理由であれ、人を傷つける行為は、決して許されることではない。むしろ、こうした行為は無くしていかないといけない社会福祉の大きな課題であり、間違いなく社会福祉の溝である。このような課題を通して、社会福祉は人間の心を見過ごさずに、どう捉えるかである。

家族が、自分の家族に手をかけること自体、その時点で心が尋常ではないことは容易に想像できる。注目すべきは、介護に懸命に奮闘していた者たちが、何かの拍子に心が歪み、非人道的行為を起こすのである。繰り返すが、こうした行為は肯定されることではない。が、彼ら彼女らの心に何が起きたのか、何故倫理観に歪みを生じてしまったのかである。

社会福祉は、人間の心に沸く歪みを見逃して良い訳がない。毎度起こる社会福祉の溝にある人間をどう捉えるべきなのか、そのためには何が必要なのか議論されるべきことだと考えるのである。

2-4. 社会福祉の現状と課題

社会福祉分野の研究や支援方法は近年飛躍的に進展し、新しいシステムやマニュアルの構築によって、多くの課題解決に貢献している。また、取扱う課題でシステムのエラーが起きる度に、scrap and buildを繰り返し対応をするのである。

他方、システムやマニュアル作りをどれだけ繰り返しても社会福祉の課題は消失することはなく、社会の複雑化とともに課題は山積し、社会福祉の溝は埋まることはない。(図2)

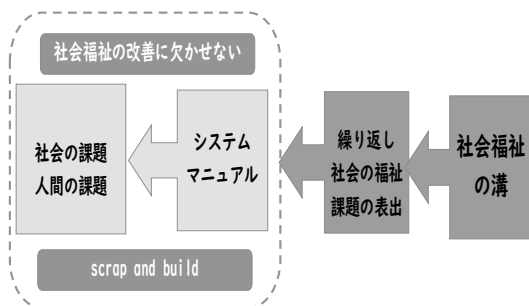


図2. 社会福祉の課題解決の状態

貧困、虐待、自殺等、ありとあらゆる人間の生きること、生老病死に関わる全てのことが社会福祉の課題である。介護で起きる家族による非人道的行為の問題も制度や施策やサービスをどれだけ構築しても無くなることはない大きな課題でもある。

現状ではこのような事案が起きる度に、虐待に及んだ当事者たちの心理的側面の分析や支援システムやマニュアルの見直しは行われるが、同様の事件は繰り返し起きるのである。無論、こうした研究や支援方法の改善は、現状を打破して行くためには必要な手法ではある。が、人間の心を深く洞察するには果たしてそれだけで良いのか。介護の課題解決に、これまで社会福祉は、事象分析、そして環境や教育整備に注力してきた。しかし、それだけでは本当に人間を捉えきれているといえるのだろうか。

現代社会の複雑さは、ますます格差社会を生み、社会から押し出される人たちの孤立、人と人との関係性の希薄さから起きる心の歪みは、家族介護によって起きる非人道的行為にも無論当てはまることである。社会福祉の問題は紛れもなく人間である。人間の疎外的状況や人間

の本質に眼を向けることも社会福祉には重要な観点といえる。システムやマニュアルの構築だけでは見えない人間の心をどう考えて行くべきか社会福祉は岐路にある。

例え完全なる解決論が見出せないとしても、繰り返し起きる社会福祉の溝を埋めるべき、人間を捉えなおす方法や知の統合が今必要だと考える。

3. 心の歪み

3-1. 人間疎外と倫理観の連関

人間の心は、常に一定ではない。環境やその時の状況により心は揺れ動く。それでは、何故人間に悪が生じるのであろうか。人間の心は、何かの拍子に歪みが生じ、ともすればそれで自己を見失い倫理観の崩壊に繋がる。

自己のよそよそしさ、自分らしさを見失う様に人間疎外という概念がある。もともと人間疎外や自己疎外は、哲学や社会学、経済学で用いられ「人間らしさ、自分らしさの喪失」を意味し、人間が本来あるべき自己の本質を見失い 自己にとって疎遠であるような状態と表している。¹¹⁾ 人間が機械的になることにより自らの行動への無力さ、人間としての振る舞いの欠如、社会規範の崩壊、そして本来の自己を見失う心のあり様である。

現代社会の人間が置かれている環境は、まさに疎外的な状況に陥りやすく、きっかけがあれば誰にでも起こり得る心の変容だと考える。人間が疎外的になることと、心の歪みは全く無関係とは言い難く、そこから波及する心の変容は、自己のみが知るところの無意識という内在の意志の選択ということになる。

家族介護で起きる介護殺人は、特定の人たちだけが起こすことだと到底思えず、誰でもその立場になれば起こり得る出来事かもしれないし、それは誰の中にもある内在する心なのだと考える。

人が人を支える行為とは、教科書通りや綺麗事だけでは決して進んでは行かない。介護の始まりは、終わりなき支援の始まりでもある。支えることの遣り甲斐や楽しさと同時に、難しさも確実に存在し、それが社会の現実でもある。家族こそ葛藤、そこにある矛盾、その渦の中に身を晒しているからこそ心も揺れる。その心の揺れがいつしか大きな歪みとなり、倫理観が崩壊し悪が表出する。然らば人間の心の歪みによる倫理観の崩壊は何故

起きるのか。

人間の置かれている環境、貧困や孤独、紐帯との離脱、周囲からの孤立。それだけではない自身の善悪をも揺るがすような介護を通しての葛藤との戦い。あらゆる概念を覆される家族介護の難しさ。こうした状況に人間は常時、晒されることにより、いつの間にか自己が疎外的になる。そうした自己の心の変容に気づくことなく進む日常が介護なのである。

人間は、逃げ場のない状況に身を置いた時、誰の中にもある表裏の心が傾斜する。本来あるはずの自己のブレーキが効かなくなり、他者を顧みることへの忘却、知らぬ間に心が歪み、コントロール不能時に人間の倫理観は崩壊する。(図3)

それは、決して特別な感情ではない。誰にでも起こり得る心の歪みである。疎外的な社会の状況、誰の中にもある心の脆弱性は、人間の善悪をも揺るがし、倫理観さえも容易く崩壊させる。

こうした人間の内在的な心にフォーカスすることも、社会福祉を再考するうえで十分に必要の観点であると考ええる。

社会福祉の課題に対して、システムやマニュアルだけで解決できない人間の心を内観し、如何に人間を理解するかを考えることも重要であるといえるのである。

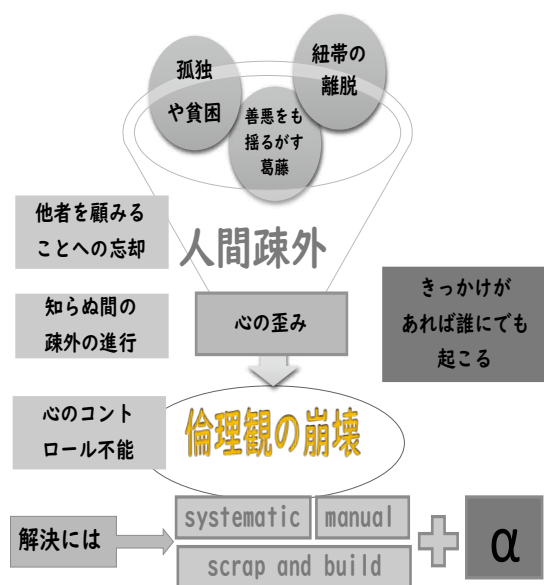


図3. 心の歪みと倫理観の連関

3-2. 人間の心の善と悪

人間は何故悪を起こすのか。人間の外とへと表出する言動行動は内なる心によって起きる。内なる心は人間の行動や言動へと影響を及ぼす。人間の内なる心、意識の根底に潜むものをどう捉えていけば良いのか。

人間は生まれながらに悪の心だけを持つものは存在しない。なのに、社会では数多くの理解し難い不条理な問題が起きる。そのほとんどは、人間の心が深く関与している事象ばかりである。幸福に生きることを望む人間の心が、何故悪へと傾斜するのか。

再び述べるがアウグスティヌスは、人間が起こす悪について、善と悪は元来別なものとして考えるのではなく「形があればこそ、その損ないとしての悪があり、光があればこそ、影があるのである。影がある悪そのものが（光なしに）それだけで存在することは有り得ない。」²⁾とし、人間は生まれながら善や悪を分裂しながら持っているのではなく、どちらも人間の中に同一として存在していることを表している。それが、いずれかの状況時に善が萎縮し、その反転として表出するのが悪の正体である。

悪は特別なものではなく、誰の中にも存在する光と影のように善と悪は表裏一体であり、善が欠如した時に悪が起きる。さらに、アウグスティヌスは「人間の悪は自由意志の選択から由来する」とし、自分自身の思い通りにならない「意志の弱さ」が最低のものの方へ転落し、内なる自己を捨てて外部に向かって膨れ上がっていく、それを「転倒した意志」とし悪を表している。²⁾

ここから理解されることは、悪を起こす者、悪の心を持つことは、一部の限られた特別な者たちだけが抱く感情ではないということである。自己と他者との関係、社会の中で生きている我々全て、誰の心の中にも起こり得る人間の心の弱さが連関し、表出したものが悪である。また、そうした自己の内在にある心が外へと表出するのは、自らの選択された意志であり、悪である「不正な意志」は限度を超えて発揮されたときの動態だとしている。²⁾

アウグスティヌスは、悪とは人間が生きていく生活上で湧く欲や習慣さえも悪を招く要因であるとし、自分次第の自己の意志さえ、自分では思い通りにならない「意志の弱さ」であり、人間の内在にある悪に揺らぐ心とは自己の意志、人間の心の脆弱さと連関していることを示

しているのである。

人間の心とは儚く脆い。だからこそ何かの拍子に自己が気づかないうちに疎外が進み、そして自分勝手な支配と暴力という破壊的方向性も秘めている。また、反対にそれを制御できるのも自己自身でもある。そして、それは誰の中にもある人間の心と密接に絡んでいる。

4. 社会福祉の再考

社会福祉の課題を考える時に、社会科学だけではどうしても観えてこない人間の理解をどう捉え、どう焦点を当てていくのかは、今後さらなる議論が必要である。福祉における問題は、もともと人間を中心とし、その役割は、人間の「生」を全体的に捉え、それを阻むものがあれば問いただき、本来の方向へ導くことを担うことにある。

他方、現状の社会福祉の考え方は、systematicな研究方法が主流で実際に大きな成果を挙げていることも確かである。一方で社会福祉の溝とも言える人間理解が空洞化しつつあることも確かな事実である。

ここで立ち返るべきが、社会福祉の原点ともいえるソーシャルワークのグローバル定義である。

Underpinned by theories of social work, social sciences, humanities and indigenous knowledge, social work engages people and structures to address life challenges and enhance wellbeing.

その意図するところ「ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学および地域・民族固有の知を基盤として、ソーシャルワークは、生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける。」¹²⁾とある。

つまり、社会福祉の問題解決には、より多元的で横断的な学問領域の探求と思考が統合すべきであり、さらに知のエッセンスを加え人間理解を深めていく必要がある。それには定義が示すように複数の学問分野をまたぎ、その境界を超えていく広範な科学的諸理論および研究が社会福祉には必要なのである。

ここで忘れてはならないのが、社会福祉の問題は紛れもなく人間だということである。人間の本質に眼を向けることに立ち返ること、人間の「生」を再認識すること

を社会福祉は忘れてはならない観点といえ、今まさに重大な岐路にあるといえるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、家族介護で起きる非人道的行為から人間の心の歪みや悪について、アウグスティヌス哲学の極一部に触れ論じたが、人間を深く内観し社会福祉の課題を深く考察していく部分においては不十分であり、さらに検討する余地がある。

本稿で取り上げた介護殺人や介護心中は誰か特定な問題ではない。紛れもなく社会を形成するそれぞれの問題でもある。決して個人の問題ではなく社会全体の問題でもある。

社会福祉を考える時に人間が起こす問題に、人間の心を置き去りした解決はあり得ない。福祉の目指すべきところ、普遍的価値への探求を実践すべき、多くの知見を活用しながら知の統合を行い社会福祉の発展に貢献していく所存である。

付 記

本稿は、日本福祉のまちづくり学会 第24回全国大会（東北オンライン）にて発表した内容に加筆修正を加えた。

注

1. 厚生労働省令和元年度「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」に基づく対応状況等に関する調査結果の資料2の中にある表2を筆者がグラフ化した。
2. 厚生労働省令「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」に基づく対応状況等に関する平成27年～令和元年の調査結果を筆者が表にまとめた。

引用・参考文献

- 1) 出村和彦「アウグスティヌス「心」の哲学者」

2017. 10. 20第一刷発行 岩波書店
- 2) 伊藤邦武他責任編集「世界哲学史2」 出村和彦
第10章「ラテン教父とアウグスティヌス」2020. 3.
25第3刷発行 筑摩書房
 - 3) 厚生労働省 令和元年度「高齢者虐待の防止, 高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」に基づく
対応状況等に関する調査結果 資料2
<https://www.mhlw.go.jp/content/12304250/000708460.pdf> (閲覧日2021. 7. 20)
 - 4) 厚生労働省令和元年度「高齢者虐待の防止, 高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」に 基づく
対応状況等に関する調査結果 資料1
<https://www.mhlw.go.jp/content/12304250/000708459.pdf>(閲覧日2021. 7. 20)
 - 5) 厚生労働省 平成30年度「高齢者虐待の防止, 高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」に基づく
対応状況等に関する調査結果 資料2
<https://www.mhlw.go.jp/content/12304250/000584235.pdf>(閲覧日2021. 7. 20)
 - 6) 厚生労働省 平成29年度「高齢者虐待の防止, 高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」に基づく
対応状況等に関する調査結果 資料2
<https://www.mhlw.go.jp/content/12304250/000491672.pdf>(閲覧日2021. 7. 20)
 - 7) 厚生労働省 平成28年度「高齢者虐待の防止, 高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」に基づく
対応状況等に関する調査結果 資料2
<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304250-Roukenkyoku-Koureishashienka/0000197121.pdf>(閲覧日2021. 7. 20)
 - 8) 厚生労働省平成27年度「高齢者虐待の防止, 高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」に基づく対
応状況等に関する調査結果 資料2
<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304500-Roukenkyoku-Ninchishougyakutaiboushi-taisakusuishinshitsu/0000155730.pdf> (閲覧日2021. 7. 20)
 - 9) 朝日新聞デジタル「夢くだいた家族の不条理21歳, 孫娘の孤独な介護殺人」
<https://www.asahi.com/articles/ASNBZ4RHVNBPP>
IHB00W.html (閲覧日2021. 7. 20)
 - 10) FNNプライムライン「10年以上の介護の末, 認知症の母を息子が殺害 なぜ事件は起きたのか? 「家族介護」に生じる“孤立”」<https://www.fnn.jp/articles/-/111246> (閲覧日2021. 7. 20)
 - 11) 新村出書「広辞苑」1994年9月12日 第4版第4刷発行 岩波書店
 - 12) ソーシャルワーク専門職のグローバル定義
解説 2016年3月版
社会福祉専門職団体協議会(社專協) 国際委員会・
日本ソーシャルワーカー協会・日本社会福祉士会・
日本医療社会福祉協会・日本精神保健福祉士協会
https://www.jacsw.or.jp/citizens/kokusai/IFSW/documents/SW_teigi_01705.pdf
(閲覧日2021. 7. 20)
 - 13) アウグスティヌス 山田晶訳「告白Ⅰ」2014年3月25日初版発行 中央公論新社
 - 14) アウグスティヌス 山田晶訳「告白Ⅱ」2014年3月25日初版発行 中央公論新社
 - 15) アウグスティヌス 山田晶訳「告白Ⅲ」2014年3月25日初版発行 中央公論新社

